



平和へと続く道

三島村立三島片泊学園 8年(中2) 永田 結夢

目の前に、真っ直ぐな一本道がある。あまりにも長い道の先は、何か別の所へ通じているのではないかと思ってしまうほどだ。両脇には、桜の木が植えられており、四季折々の様々な表情を見せてくれる。その道の先は、どんなに背伸びしても見えない。私は、一回深呼吸をしてから、ゆっくりと目を閉じた。

この道がなぜこんなに長く真っ直ぐなのか。私は初めてその事実を知ったとき、思わずその場に座り込んでしまった。何度来ても、その感覚に襲われるようで、ここには、正直あんまり来たくない。しかし、来ないわけにはいかない気持ちになるのは、なぜだろう。

この道は、七十六年前、特攻機が出撃するための滑走路として使われていた。戦況が悪化していく中、海軍の重要基地の一つとなった。戦闘機ごと敵の戦艦に突っ込むことを命じられ、私と年の変わらない多くの若者が出撃していった。終戦までの半年間で三百六十三名もの尊い命が犠牲になった。この衝撃的な事実を知ってから、いても立ってもいられなかった私は、特攻の事について詳しく調べたり、学んだりするようになった。そのことが、犠牲になった方々への追悼の意を表することになるのではと思っていたがそれは、私の勝手な思い込みだった。

詳しく知るだけでなく、そのことを次の世代へと伝えるまでが、私たちにできる「追悼の意を表する」ということになるのだ。閉じていた目をゆっくりと開け、空を見上げた。生きて帰れない恐怖、家族に会いたい想いを胸に、彼らは、気持ちとは裏腹なこのまつ青な空に吸い込まれていったのだろう。

近くの公園から、子供たちの笑い声が聞こえる。「ああ、これが平和か」「あの特攻隊員達が残してくれた平和なのか——」そう思った。視線を下ろすと、そこには、陽があたり輝く道がある。この道の先は、平和へと続いているに違いない。なぜなら、私に平和のことを考えるように導いてくれた道だから。

(審査評) 未来に過去に思いを馳せる多くの「道」が綴れる中で、一躍目を惹いたのは永田結夢さんの「特攻機が出撃した滑走路」でした。七十六年前に、特攻機が飛び立った一本の道に立った時、永田さんは「ここには、正直あまり来たくない」と語っています。しかし、そこから目を逸らさず永田さんは特攻隊について考え、私たちにできるのは「追悼の意を表すこと」だと結論づけます。文章の後半で聞こえてくる子どもの笑い声。文章全体を包み込む美しい風景描写。それらが相まって、平和の尊さを教えてくれる。見事に「平和への道」を描いてくれました。

ひきたよしあき